第７２号　２０２３年９月１日

特定非営利活動法人

アーシャ

ASHA　アジアの農民と歩む会

会報
72号

8月11日マキノスクールコミュニティー田植えの日。学生、スタッフ、組合（AOAC)スタッフが朝6時半に集合し作業開始

NPO法人アーシャ,による企画ツアー

インドスタディーツアー参加者募集

アラハバードのプロジェクトと近隣の農村を訪問します

その他、ベナラシ、サルナート、デリー観光があります

日程：　2024年 3月 3日（日）～3月12日（火）
　　オプションでウッタラカンド州の山岳地帯の事業地を訪問可能
旅行代金：　￥250，000/１人　（オプションの経費は別途）
　　（航空券、インドでの交通費、滞在費、食費を含む）
内容：現地プロジェクト事業活動の参加、農村訪問、事業地近くの観光
お問合せ：メール：recruitment@ashaasia.org 又は電話：0287−47-7840（アーシャ事務局）

マキノスクール学生（SCSAD:　9ヵ月コース）、2024年6月～翌年3月下旬インターン・ボランティアを募集しています

現地で日本語と英語の事務作業を中心に様々なアーシャの現地での活動に携わっていただきます。
例えば、組合製品の販売促進、英語教師、衣服・工芸品のディザイン、Website・会報等に使う写真撮影、等
詳しい活動内容はアーシャのホームページ（ashaasia.org）を参照ください。

巻頭言

継続すること、協働することの大切さ

三浦　孝子
アーシャ代表理事

7月にSCSAD（持続可能な有機農業村開発コース）が4年ぶりに再開できたこと、また、受講を希望していた8名の研修生が全員、無事、プラヤグラージに到着、研修が始まったこと、本当に喜ばしく、奇跡のようです。たくさんのご支援をありがとうございます。

私は、2008年より年2回ほど、母子保健専門家として、インドの事業地に行っておりましたが、SCSADコースでも、必ず、保健（特に母子保健）の授業をしてきました。男性も、女性も一緒に学びます。妊娠中から出産後の女性を守ることの大切さ、赤ちゃんの命を守る母乳育児の大切さとそのやり方、乳幼児期の健康の大切さ、そして家族の健康について話し、ディスカッションしてきました。オーガニックファーミングを学ぶ研修生ですから、地域で、女性、子どもたちをどう守るか、自然と人間の共生の中で、より健康に過ごすにはどうしたらよいか考えていただきたいのです。

お金があるから、病気になれば病院へ行けばよい、という発想ではなく、予防の大切さ、普段の健康な生活を守るため、「食べる」ことの大切さを知り、より健康な食べ物を育ててほしいのです。また、自分と自分の家族だけ健康にと願うのではなく、周りの人々とも健康についての知識は、共有したほうがより効果的。たとえば、VHV(農村保健ボランティア)の活動が参考になります。

アーシャがJICAや助成金を活用し、2008年から2017年年までに育成してきた農村保健ボランティア（VHV）は、100名を超えました。現在、VHVの組織として活動はしていませんが、一度身に着けた母子保健の知識、栄養の知識は彼女たちの中で消えることはありません。自分の家族の健康のためにも、政府の保健活動要員として雇用された時も、結婚して新しい家族を持った時も、学んだ知識や技術はいつでも役立てることができます。

VHVの中には、シータさんのように、2008年からずっと現役VHV、今では、モリンガ栽培･加工、豆腐作りのプロ、カフェ運営までこなせるマキノスクールになくてはならない大切な人材もいます。ビムラさん、中断はありましたが、現在、モリンガ栽培、加工部門で活躍中。

SCSAD研修生にも、マキノスクールでの学びを大切に継続してほしい、困難も、仲間と一緒に取り組むことで道は拓けることを知り、よい学びができますように。

2010年3月農村保健ボランティア（VHV）3日間宿泊トレーニングに参加した農村女性たちと筆者（左端）
現在も豆腐やモリンガの加工事業に携わってくれているシータさん（右から6人目）ビムラさん（右から5人目）

マキノスクールの卒業生は今

経験と成長の旅

マーガレット・モロモー
総務主任兼研修企画担当
マキノスクール（2003年卒）

私の名前はマーガレット・モロモーです。みんなからはマギーとかエドウィンと呼ばれています。インドの西ベンガル州の北にあるカリンポンという丘陵地帯出身です。私は2002－03年度にマキノスクールの一般農業研修コースに参加しました。農業の知識も殆どないまま、マキノスクールに到着しましたが、当時の研修生は私以外全員男性が10人。その中での農作業は私にとって非常なチャレンジでした。かと言って、男性と女性の分け隔てはなく、理論も実践も男女平等に学ぶ機会を与えられました。研修の一番素晴らしかった点は、実践に力を入れていることで、理論や知識を現場で使うことができることでした。「やってみることで学ぶ」ということの重要性を特に強調した総合的な学びとなりました。その研修を通し、農場からテーブルに食べ物が運ばれる過程を深く知ることができました。

その経験から農業の多様な側面と農場で役に立つ貴重な知識と技術を身に着けることができました。学んだことは、野菜作物の栽培技術から始まり、土壌や畜産の管理までに渡りました。研修中に最も困難で、また強い興味が沸いた科目は稲作でした。この授業では、種もみの選別や選別消毒処置、栽培、収穫、収穫後の技術まで、このすばらしい主食作物のライフサイクルを学びました。調査研究のために学生一人ずつに別々の種類の種もみがあてがわれました。その研究のレポートを提出した時の満足感は忘れられません。また、その研究で得た知識を、当時のアラハバード農業大学（現在のサムヒギンボトム農工科学大学）の博士課程の学生にも分かち合ったことは、自信を得る体験となりました。当時の学部長・牧野先生は、稲作の専門家であり、授業も実践もとても厳しかったことを思い出します。

農村開発の現場では、改良された農業の実践や生計を得る機会がどのように農村の能力を高めたか、その効果を実際に見て、多くの気づきを得ることができました。一般農業研修コースはその後の私の人生の旅路においても、ずっとインスピレーションの源となりました。自分の出身地に戻った後も、学んだことを実践し、良い結果を得ることができました。

7月29日のマキノスクールスポーツデイ。学生とスタッフがグループをつくり競技を楽しみました。記念品を学部長・三浦先生より受け取る筆者（左より2人目）

20年経ち、こうしてマキノスクールに、今度はスタッフとして戻ってくる機会を得ることになりました。研修コースの名称は、持続可能な農業農村開発研修コースに変わるなど、多くの変化がありました。研修は更に異なるインドの州や他の国にも参加する機会を広げるようになっていました。当時の農場も、大学のキャンパスの別のところに移っていました。このことは、環境問題への配慮と長期にわたる持続可能性を約束する実践を取り入れていることを意味していると思います。現在の研修コースは近代技術も取りこみ、改良を重ねた農業を教えていると思います。

日本から来られた牧野先生のビジョンは、農業の実践を改善するために地域や農村の人々との協力し、知識や技術を分かち合おうという情熱によって推し進められました。それは、その後、三浦照男先生や川口景子さんや、その他の自発的意思を持った方々によって引き継がれ、農村の人々の自主自立が育まれてきました。私は彼らが自分の愛する人や家族、美しい国を置いて犠牲となり、底辺の人々を力づけるためにここにきたことに、心の底から感謝しています。「人に魚を与えればその人はその日を生きるだろう。しかし、魚の捕り方を教えたら、その人の一生を満たすことになる」。日本人の開拓者はみんなこの言葉を信じています。この哲学が彼らの教育に対する努力の基盤であると思います。

農村の若者を育てる
持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）

私たちの人材育成
～土を愛する若者をつくる～

現地事業統括責任者・三浦　照男

私が所属する北インドU.P.州プラヤグラージ県にあるサムヒギンボトム農工科学大学は1909年にアメリカの長老派宣教師によって設立された農業学校が現在総合大学に発展しました。しかし、大学が巨大化すればするほど、農学を学んで政府機関、農業関連企業に勤めることを目指している卒業生がほとんどで、農村住民のための働きをしようとする卒業生がほとんどいないという状態でした。このような状況下で、都市部と農村部の格差が広がり、疲弊する農村を改善しようと立ち上がる農村青年の育成の必要性が高まっていました。そこで、1975年にマキノスクールの創設者である牧野一穂氏が、農村青年のために教育機会を与えようと当大学農学部に設立されたのが、ノンフォーマル教育センターであったのです。牧野氏のこの功績が認められ2009年にマキノスクールと改名されました。

当初より農村のエリートを育てるというよりは農村の「土」に根ざした若者の育成を目指してきました。特に筆者が2004年に牧野先生から引き継いでからは有機農業を柱とし、「健康な土づくり、その土による健康な食べものを、そして人々の健康な体と命をつくる」ことを念頭において研修を進めました。このような土づくりに希望を持てるような教育を目指してきたのです。この若者の人材育成コースを「持続可能な農業農村開発コース」と改名し、7月から3月までの10ヵ月間の研修としました。カリキュラムはいたってノンフォーマル。即ち固定したカリキュラムはありません。学生出身地の農村環境、関心、英語能力、教育レベルを考えながらカリキュラムスケジュールを立てていきます。10名前後で、年齢も１８歳から４０歳まで、高卒から大卒までまちまちです。だからこそ柔軟性のある研修が必要且つ重要となっています。

土づくりと環境保全を中心とした循環型有機農業、多様な野菜作物の栽培のみならず、それらの農産物の食品加工も学び、更にオルタナティブな販売方法を学ぶ。殆どの研修生にとってはハードで、挑戦的な学びです。更に、リーダーシップの能力を培ってもらうために、月に一度の朝の集会の司会や様々なイベントでリーダーとなってもらっています。インド各地から、またミャンマーなどの周辺諸国から、更に日本からもこの学びに参加しています。異文化環境の中で切磋琢磨し合いながら10か月間学ぶのです。自ら育った環境や文化、また自身を再認識、再評価するためにも異文化環境での学びは一生忘れられないものとなっているようです。多様なものを単に忌避するのではなく、理解しようとする努力が必要なのです。

平和な社会に近づくために、多数派、少数派双方が互いの文化、歴史、宗教に敬意を払う姿勢が必要なのです。独自な文化や宗教は彼ら彼女らが生きて来た誇りなのですから。

私たちの活動は小さな群れです。今年度もインド５名、ミャンマー２名、そして日本１名、総勢８名（男女各４名）の学生がマキノスクールで学んでいます。平和な社会へ向かって希望を見出せるような研修にしたいと願って活動を続けてまいります。今後も皆様のご支援、ご協力をお願い致します。

位置	名前	年齢	国	民族	所属
前列左1	ジー・パン	36	ミャンマー	カチン族	メッタ開発協会
前列左2	カピュル	24	インド	ロンメイナガ族	ロンメイナガバプテスト教会開発部
前列左4	ガガ	19	インド	ロンメイナガ族	ロンメイナガバプテスト教会開発部
前列左5	クン	30	ミャンマー	パ・オ族	メッタ開発協会
後列左2	Sr.メリー	24	インド	ジャルカンド	医療女子修道会
後列左3	Sr. スマン	32	インド	パンジャブ	医療女子修道会
後列左4	本田樂	19	日本	日本	愛農学園農業高校専攻科卒
後列左5	チュン	25	インド	ロンメイナガ族	ロンメイナガバプテスト教会開発部

2023年度のSCSAD学生は7月より学びを開始

7月15日、入学式で、学生全員によるスペシャルソングを披露

スポーツ大会前の朝の集会。リーダーは学生

農業用光合成細菌について学ぶ学生

育雛箱の作り方を学ぶ学生

キノコの菌種培養の実習をする学生

簡単な器具での豆腐づくりを学ぶ学生。後に機器を使った製造を学ぶ。

雨よけ野菜栽培をする学生

個人プロジェクト圃場で話し合いながら野菜作り。

有機農業組合での苦闘

川口　景子

アラハバード有機農業組合マネージャー

今年１月にアラハバード有機農業組合（AOAC）のマネージャーとして働いていたラヴィと販売担当職員が急に辞職しました。そこで、マキノスクールの事務局に着任したマーガレットを補佐しつつ、急遽私が組合のマネージャー兼マーケティング担当として就任することになりました。コロナ以降様々な要因が重なり、窮状に陥っているAOACを建て直すことなどできるのだろうか、と正直重く感じましたが、設立以降、度重なる危機を何度も乗り越えてきたのも事実。活動の経済的サステナビリティや自立は「販売力＝価値を認めてもらえる力」なくしてはあり得ないので、改めてAOACが育んできた価値や人を大事にして発信し、改善できるところは謙虚に改善する、新たにチャレンジさせていただく機会と捉えました。

AOACは、現在資金難の状況下にあります。コロナによって外食産業や日本人駐在員の人数は落ち込み、昨年あたりから緩やかに回復しつつも、以前とは変化した市場で再び新たなつながりを再構築する必要が緊急にあります。また、緩くなっていたコストの見直しと管理、お米の質の改善やコクゾウムシ対策、厳しくなってきているインド食品安全基準局（インド版日本食品衛生協会）への対応、農家の有機認証登録の手続きの仲介など、農産品を生産・加工・販売する上で、時には罰金を課されるような課題を解決しなければならない状況に直面しています。

課題の一つ、お米の質の改善について、農家と話し合った際、私たちは本当に農家と一緒に歩めているのだろうかと自問自答することがありました。現地で栽培され、特に５月の気温約45度下で収穫されるお米は、籾の収穫量はそれなりでも、精米すると白米が30%にも満たない農家があります。ハーベスターも使わず手作業で刈り、炎天下で地べたに置いて、2～3日後に稲を拾い集めて手作業で脱穀すると、乾燥しすぎて籾の中でお米が割れてしまいます。ですので、農家から組合が籾を購入する価格を精米率によって設定しないと、資金不足に歯止めがかかりません。またそうすることで、乾燥を防ぐための対策を自然と促すことができるのではという狙いもあります。しかし、設備の不足している中、炎天下での労働をされている農家に、そのようなことを提案するのもためらわれましたが、何もしなければ状況は変わりません。提案をすると農家からは当然不満がでました。その中でも精米率50%を達成した農家がいました。彼にどのように対処したのかを聞くと、「収穫後すぐに木陰に稲を移動させた」とのこと。他の農家からは、「そもそも農地に木がない」、「木を植えられるような土地もない」とのこと。他の農家からは、「夏場収穫のお米の植え付けは、一農家の作付面積を少なくすることで乾燥を防げるのではないか」「その分秋収穫分（単位面積当たりの収穫量は低いが質は良い）を増やせばよい」、という建設的な意見もでました。「収穫量＝収入」という考え方だけでは、出てこない意見です。自分の収入を限界まで増やそうとすることで、組合全体のロスが増える。それでは組合はやっていけないから、個人個人の収入が少し減っても、組合の運営を守ろうというように捉えることができます。

その時、頭をよぎったのは数年前、当時私が組合の書記であった時、組合長の横流しによる裏切りで、農家が組合の経営に不信を持ったことがあり、また元組合長側についた農家もあり、共謀疑惑を言いふらされた私は、いつしか農家と関係を築くことを恐れるようになっていました。ですので、再び農家と向き合うこと自体が大きな壁でした。でも、こうして真っすぐ向き合おうとすると、理解して話し合い、解決策を導き出そうとしてくださる農家もいることがわかりました。まだまだ問題を多く抱える組合ですが、一緒にこれまで歩んできた仲間と問題を共有して一つ一つ解決していくこと、それによって、また組合として成長を遂げることができるのだと実感した経験でした。

しかし、今後の組合の自立を考えていく上で「日本人がいて、できているからそれでいい」のかという疑問がついてまわります。インド人の職員や若い人たちが、この活動の意義を理解し、大きなビジョンに向かって、様々な必要な仕事ができるようになっていかないといけないことは確かです。仕事は山ほどありますが、どのような状況下でも忍耐をもって行動する人が不足しています。

アーシャではこういった活動を、謙虚に学び、担い、現地の青年と一緒に働くインターンを募集します。農業での国際協力に関心があり、異文化に関心を持ち、英語でコミュニケーションが図れ、ヒンディー語も積極的に学ぶ意志があり、周りに働く背中を見せて、周りに良い影響を与え、自分も変わりたいという情熱を持つ方、どうぞ応募してください。海外に出てインドという国、人に触れることで、外から日本や自分自身を見つめ、成長する機会となると思います。

2023年度通常総会の報告

2023年度通常総会は、6月4日(土)14時30分から那須塩原市健康長寿センターの会議室にて開催されました。本年も、会場参加とWEB会議を利用した参加を組み合わせての通常総会でした。

三浦孝子代表理事、三浦照男副代表理事、佐藤耕士副代表理事、大浦智子理事、青野勇理事、正会員2名、賛助会員3名、支援者1名が会場で参加されました。さらに、及川洋征理事、開義民理事、正会員２名が　WEB会議を利用して参加されました。また、書面表決者5名、委任状出席者数17名、合計32名、正会員総数51名の3分の1以上の出席がありました。

通常総会に先立ち、同日13時から理事会が開催されました。三浦孝子代表理事が議長となり、理事会の開会を宣言し、議事に入りました。各議案の審議が行われ、2022年度(第19期)事業報告(案)および決算報告(案)、2023年度(第20期)事業計画(案)および活動予算(案)は承認され、通常総会へ上程されました。また、本年は、役員選任の年になっており、三浦孝子代表理事から役員選任（案）の説明がなされました。
理事は、桝本進理事が7月21日任期満了で退任し、伊藤

幸慶氏、板野拓海氏を新任とすること。監事は、田村修也監事が任期満了で退任し、高木国男氏を新任とする案が説明されました。三浦副代表理事から伊藤氏、板野氏、高木氏の略歴が紹介されました。満場一致で承認されました

14時30分、三浦孝子代表理事が通常総会の開会を宣言し、議長の佐藤耕士副代表理事が議事を開始しました。プロジェクト統括責任者の三浦照男副代表理事から2022年度(第19期)事業報告(案)、事務局丹羽寿美から決算報告(案)が説明されました。コロナ感染拡大が収束し、農村女性リーダー育成を軸に、ウッタルプラデシュ

州のモリンガ栽培・加工事業とハンディクラフト縫製事業の支援を継続しながら、JICAの資金を活用してウッタラカンド州で現地NGOと協働で大豆栽培普及による農村女性の組織強化、所得創出の活動を行うはずでありましたが、現地政府の承認が得られず、2022年度中に事業を開始できませんでした。

ウッタルプラデシュ州における農村女性によるモリンガやハンディクラフト事業は計画通り実施することができ、日本への輸出と同時に、インド国内に日本人が戻ってきたことで、自立に向け売り上げを伸ばせました。

三浦副代表理事から、2023年度(第20期)事業計画(案)について、また、事務局丹羽寿美から活動予算（案）の説明がなされました。会費、寄付金、JICA草の根技術協力事業の資金（11月開始見込のため四半期分）で各種事業を実施する計画であること、クラウドファンディングで集めた奨学金で、4年ぶりの持続可能な農業・農村開発コースを実施すること、インターンシップ研修費を活用した事業活動を行うことなどが説明されました。
役員の選任について説明、承認を諮ったところ、満場一致で承認されました。

閉会前に、三浦孝子代表理事から会員活動の活性化について説明があり、会員数の加増に努めた結果、現在アーシャ会員は108名です。田村監事より会員は組織の基盤であり、会員の輪を広げ、良い関係を築き、組織を強くするため、会員の獲得・継続に繋げるようにと助言いただいることから、より活発な会員活動について意見交換したいと提案があり、ご参加の皆様の自己紹介に加え、活動に関してのご意見をいただきました。感謝です。
承認された2022年度(第19期)事業報告書と活動計算書・貸借対照表、2023年度(第20期)事業計画書はホームページのアーシャとは／事業報告書のページに　掲載しています。通常総会後、懇親会が開かれました。

アーシャ事務局便り

特定非営利活動法人 アーシャ ASHA アジアの農民と歩む会
事務所・交流センター
〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢８３－１７
ＴＥＬ／ＦＡＸ ０２８７－４７－７８４０

あなたの想いを世界へ、あなたの寄付でアーシャの活動を支えてください。

とちぎグローバルセミナー 2023

とちぎ国際交流センター(宇都宮)では県内で国際理解・国際交流・国際協力等の活動を行う団体による“世界を感じる”16のセミナーが開催されています。当会は、8月5日(土)に「北インドで農村開発を学び合う若者たち」と題してセミナーを開催しました。講師は三浦孝子代表理事。参加者が、マキノスクールの「持続可能な農業・農村開発コース」(SCSAD)で学び合うミャンマー、日本、インド各地の学生８名とオンラインで交流しました。川口景子インド事務局長が通訳となり、学生に加えて、マキノスクールの講師、モリンガや手工芸品等の生産を担当するAOAC／AVSスタッフも参加し、自己紹介や現地活動のようすなど生の声を聴くことができました。逆に、SCSAD学生から「日本では有機野菜は売れるの？」と質問があり、講師が「もちろん、健康にもよいオーガニック野菜は人気です」と回答しました。会場では、フェアトレード商品の展示販売、モリンガ茶やパンを試食していただきました。後半は、インド発祥の笑いヨガを紹介し、全員で　体験していただき、参加者から、とても楽しかったとご感想いただきました。

ご寄付のお願い

当会の活動は会員の会費と会員・ご支援者からのご寄付に支えられています。皆様のご支援･ご協力に心より感謝申し上げます。2023年度活動を発展･強化するために、ご寄付にご協力ください。ご寄付の方法をいろいろ用意しておりますのでよろしくお願い申し上げます。

http://ashaasia.org/shien1/

ネットショップ「ASHA STORE」では、特選モリンガパウダーを組み合わせた寄付･募金を用意しております。

https://ashaasia.stores.jp/

事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。 2023.3.21～2023.8.12　順不同、敬称略

誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

正会員	【山形県】澤谷常清【栃木県】飯沼一浩，飯沼淳子，大浦宏勝，高木国男，長嶋清
	【栃木県】村上和子【埼玉県】川口良樹，川口定子【東京都】及川洋征【長野県】青野勝
	【愛知県】町上貴也【岐阜県】板野拓海，桝本進【三重県】中西泉【福井県】松田宗一
	【兵庫県】藤岡秀英【熊本県】開義民
賛助会員	【北海道】長谷川照美【山形県】大内朋子【栃木県】今野善郎，今野歩，漆原雅子
	【栃木県】川上聖子，田仲順子，三浦邦彦【東京都】北澤麻子，吉田千佳子
	【大阪府】山本よしこ【福岡県】坂口馨子
一般寄付	【山形県】三浦恒祺【栃木県】飯沼一浩，飯沼淳子，菊地創，那須塩原教会
	【群馬県】清水信浩【静岡県】古橋克己
指定寄付	【神奈川県】卯山晴美 【奈良県】匿名　【クラウドファンディング支援者の皆様】

■**会費**　個人正会員　5,000円　団体正会員　20,000円　終身個人正会員　50,000円　終身団体正会員　100,000円
個人賛助会員 3,000円　団体賛助会員 10,000円　終身個人賛助会員 30,000円　終身団体賛助会員　50,000円

■**郵便振替**　加入者名：アーシャ=アジアの農民と歩む会　口座番号：００１６０－０－３１５１４７

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデッシュ州プラヤグラージ（アラハバード）で活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付・ご支援、日本政府の無償資金協力や日本の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会　☆この会報は日本で製作･印刷しています☆
＜事務局・交流センター＞〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17　TEL：0287-47-7840　FAX：0287-47-7841
事務局　丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org　ホームページ: http://www.ashaasia.org